

聖書：マタイ 15：1～20

説教題：人を汚すもの

日時：2019年9月8日（朝拝）

前々回と前回の箇所では5千人の給食とガリラヤ湖上を歩く出来事について見ました。この頃は人々の間におけるイエス様の人気は最高潮の状態にありました。それと関係していたのか、今日の箇所ではパリサイ人たちや律法学者たちがエルサレムからやって来ます。いわば本部からの人々です。すでにパリサイ人たちとの衝突は起こっていました。12章14節：「パリサイ人たちは出て行って、どうやってイエスを殺そうかと相談し始めた」 そんな中、もうこれ以上はイエスを見過ごしておけないとなったのか、中央からの正式な調査団がガリラヤにやって来たわけです。その目的はイエス様の問題点を指摘し、イエス様を否定するためだったでしょう。

彼らはイエス様のところに来て言います。「なぜ、あなたの弟子たちは長老たちの言い伝えを破るのですか。パンを食べるとき、手を洗っていません。」 まずここに出て来る「長老たちの言い伝え」とは何だろうか私たちは思うと思います。これは長老たちによる律法解釈のことです。ユダヤ人の宗教生活の基礎はもちろん聖書です。今日で言う旧約聖書です。しかし旧約聖書の律法は事細かにすべてのケースについて語っているわけではありませんから、日常生活への適用にあたってはガイドラインのようなものが必要になります。その実践的・具体的なアドバイスが「長老たちの教え」すなわち教会指導者による教えとして、口伝の形で伝えられて、ユダヤ人社会における一種の規範となっていました。そしてその中にパンを食べる時の手の洗いに関する教えもあったようです。

これは衛生上、食事の前に手を洗いましょうというアドバイスではなく、宗教的・儀式的な意味を持つ動作です。旧約聖書には祭司が天幕で奉仕する前に手や体を清めるべきことが規定されていました。出エジプト記 30章19節：「アロンとその子らは、そこで手と足を洗う。」 この規定が長老たちによって一般的な状況にも拡大解釈され、食事を取る時は宗教的な意味で手を洗う方が好ましい、いやそうすべきだという教えになっていました。ところがイエスのお弟子たちはこれを行っていない。これは先生がそう指導していないからである。なぜそうなのかとエルサレム本部からの指導者たちはイエス様に問うたわけです。

イエス様はその問いには答えていません。反対に彼らにカウンタークエスションを出されます。「ではなぜあなたがたも神の戒めを破るのですか?」と。長老たちの言い伝えを守っていないと言ってあなたがたはわたしを咎めるが、なぜあなたがたはもっと大事な神の言葉を守らないのですかと。そうして具体的な例をイエス様は 4~6 節で述べます。そこで取り上げられているのは「ささげ物」に関することです。聖書には十戒の第 5 番目の戒めとして「父と母を敬え」とあります。さらに「父や母をののしる者は、必ず殺されなければならない」とも記されています。ところが長老たちの言い伝えによれば、子どもが「それは神のささげ物になります」と言えば、それをもって父を敬ってはならないと教えていた。これはどういうことでしょうか。もう少し詳しく言えばこういうことです。ここでのイエス様の話からも分かりますように「あなたの父と母を敬え」という神の戒めには、将来、父母が老いて経済的に貧しい状態になったら、その子どもは自分のできることをもって自分の親をサポートすべきであるという意味が含まれています。それが「敬う」ということの具体的な適用であると。しかし長老たちの言い伝えでは、もし子どもが、私が持っているこの財産は神へのささげものとします!と誓ったら、そちらが優先されるとしました。それは神へのささげ物は神聖なものであって優先度が高いと解釈したからかもしれません。あるいは一度誓った誓いは取り消すことができないという考えによったのかもしれませんが。こうして自分の親を経済的に支えたくないとする人たちにとっての抜け道となるような解釈を打ち出していたのです。一見、表面的には敬虔です。しかし自分たちの言い伝えを高く上げるあまり、神の言葉を無にしていた。

そこでイエス様は「偽善者たち」と厳しい言葉を発されます。そしてそれはイザヤが預言した通りであると言われます。8~9 節:「この民は口先でわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。彼らがわたしを礼拝しても、むなしい。人間の命令を、教えとして教えるのだから。」 イザヤの言葉はもちろん彼の時代に当てはまる言葉として語られましたが、そこで問題にされたことと同じエッセンスがあなたがたの中にある!ということです。口先では神を敬っている振りをしている。自分たちは教えを守っていると主張する。しかし心は遠く神から離れている。なぜそう言えるかと言えば、それは人間の命令を優先させているからです。神の言葉を後回しにし、結局退けているからです。私たちはここに聖書の御言葉こそ、私たちの信仰と生活の一番の基準としなければならないことを改めて教えられます。人間の教えを同じレベルに持って来てはなら

ないし、ましてや人間の教えを上を持って来るようなことをしてはならない。神への敬いは神の御言葉にこそ聞いて従う生活に現されなければならないということです。

これとの関係で思われることは、私たち長老教会はウェストミンスター信仰告白を信仰基準として採用していることです。また政治基準や礼拝指針、訓練規定といったガイドラインも持っています。ある他の教派の人たちは、長老教会はこのような聖書以外のものを持っていると言って批判します。それはイエス様がここで否定された人間の教えである、と。それに対して我々は聖書だけを持っている、聖書のみである！と。私も昔はそう教えられて長老教会は危ないグループだと思っていました。しかしもちろんそういうことではありません。私たちも聖書のみ立場です。聖書こそが私たちの信仰と生活の唯一の基準です。しかしその聖書を具体的に適用することにおいて、信仰告白や教会規則はどうしても必要です。たとえば神とはどんな方か、キリストとはどんな方か、と問うた時、信仰告白がなければ、その答えは個人個人によってバラバラ。「聖書のみ」と語ることは簡単ですが、それだけでは個人個人の恣意的な答えしか出て来ず、簡単に誤りに陥ります。そういう中、歴史の教会が告白して来た信仰告白や信条は大きな霊的遺産であって、我々は聖書のみだからと言って、これらを簡単に投げ捨てるべきではありません。しかしやはり危険はそこにあると言うのは本当だと思います。歴史的な信仰告白を重んじ、その用語を多用するあまり、それが独り歩きし、聖書の御言葉から外れてしまうという危険がないわけではありません。皮肉なことに聖書のガイドラインとなるべきものが聖書から逸れる方向に導くという場合があります。ですからすべてのことは絶えず聖書の御言葉の下で確かめられなければなりません。それは地域教会に見られる色々な伝統や習慣、決まりごと等についても同じです。人間の解釈やルールには、いつしかごまかしが入りやすいものです。本末転倒になりやすいものです。誤りやすい人間が作るものにはいつもその危険があります。その視点のもとに、絶えず聖書の言葉こそを第一位に置いて、その下で吟味され続けなければならないことを教えられます。

さてイエス様は 10 節で群衆を呼び寄せてこう言われました。「聞いて悟りなさい。口に入る物は人を汚しません。口から出るもの、それが人を汚すのです。」 パリサイ人たちの問題点の一つは、今見た通り、人間の解釈を持ち上げて神の言葉を無にしていたことですが、それと合わせて大きな問題は、汚れは自分たちの外にあると考えていたことでした。手を洗わないと汚れが内側に入る。そう考えて、外から汚れが入らないように事あるごとに手を一生懸命に洗っていました。しかしその考え方は根本的に違う。外

から口に入る物は人間を汚さない。むしろ口から出るもの、すなわち人間の内側にこそ汚れのもとがあるとイエス様は言われます。

その時、パリサイ人たちの反応についての報告がイエス様のところに届けられました。「パリサイ人たちがおことばを聞いて腹を立てたのをご存じですか。」と。これに対するイエス様のお言葉は厳しいものです。13～14節：「イエスは答えられた。『わたしの天の父が植えなかった木は、すべて根こそぎにされます。彼らのことは放っておきなさい。彼らは盲人を案内する盲人です。もし盲人が盲人を案内すれば、二人とも穴に落ちます。』」 イエス様が言っていることは、神の言葉を後回しにしながら、そのことを指摘されて怒っているようでは、彼らが父によって植えられた木ではないということです。当時のユダヤ人社会においてパリサイ人は人々から敬われていました。律法に熱心な人々として尊敬されていました。しかし彼らは神に属する木でさえないとイエス様は言います。また彼らは見えていない人々であると。自分たちは良く見えている人間だと自負して他の人を導こうとしているが、実はその目は開かれていないので、導こうとする相手の人もろともに穴に落ちるだけであると。当時の人々からすればびっくりするようなパリサイ人たちへの評価です。いかに人の評価と神の評価は異なるかということです。

さてこの言葉を挟んでペテロがイエス様に、今のたとえの意味を説明してくださいと願います。イエス様は「あなたがたもまだ分からないのですか」と言って、こう説明されます。17節：「口に入る物はみな、腹に入り、排泄されて外に出されることが分からないのですか。」確かにそうです。口から体の中に入るものはお腹を通してやがて外に出ます。外に出るわけですから、究極的にその人を汚すものとはなりません。そうではなく、問題は口から出るものの方にある。この「口から出るもの」という表現は「口に入る物」という先の表現に対応する言い方です。口に入る物とは外から来る物です。ですからその反対の「口から出るもの」とは、それまで内にあったものということです。つまり人を汚すものは人間の外ではなく、内側にあるということです。具体的に人の心から出て来るものとして、19節に「悪い考え、殺人、姦淫、淫らな行い、盗み、偽証、ののしり」などがあげられています。これらのものが人を汚すのである。繰り返しになりますが、問題は外にはではなく内側にある。自分自身の中に、いや自分自身そのものが根本から汚れているということを問題にしなければならないということです。

私たちは自分をどのように考えているのでしょうか。私たちは外側をきれいにすること

はできます。素敵な洋服を着て、素敵な髪型にして、お洒落な格好をすれば素敵な人に見えます。町を歩いていて、そういう意味で素敵な人はたくさんいます。その人たちを見ていると汚れとはみんな無縁の人たちのようです。しかしイエス様によれば、そうではない。私たちはみな内側が腐っている。外側はそう見えなくても内側が腐っている果物があります。ナイフで割ってみたら、内部は虫が食ったようになっていて、何だこれは～、とガッカリさせられる時があります。私たちは実にそれに似ているということです。こうした自分の内側を問題にせず、私たちは色々な問題を周りのせいやしがちではないでしょうか。あの人がこう言ったとか、この人が私にこうしたとか、周りの環境や自分が置かれている社会のせい、あるいは親のせい、また学校のせい、時には教会のせいにもさえます。しかし自分を汚れた者とする原因はそれらにあるのではない。私を汚すのは私自身です。私たちがしっかり見なければならぬのは、私自身の中にこそ汚れの源があるのだということです。

私たちはこのイエス様の言葉を受け入れるでしょうか。これは大変厳しい言葉です。これを受け入れることは自分の内側は腐っていると認めることです。自分でどうすることもできない、救いようのないみじめな人間だと認めることです。しかしそんな人にも望みがあります。なぜならこの言葉を語られたイエス様は、そんな私たちをその悲惨から救い出すために来てくださった救い主だからです。ただ私たちを非難するためにここにいたのではなく、私たちを救う方としてここにおられるからです。この福音書の1章21節に、イエスという名は「ご自分の民をその罪からお救いになる」という意味であると語られていました。また十字架前夜、聖餐式を制定された際、イエス様はまもなくなされる十字架の死を指して、26章28節で「これは多くの人のために、罪の赦しのために流される、わたしの契約の血です」と言われました。イエス様はその十字架の死を通して、より頼む私たちの罪を赦してくださり、私たちの心を新しいものとしてくださいます。それは私たちを根本的に大きく生まれ変わらせる変化であるために、IIコリント5章17節でこう言われています。「ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」

確かにイエス様を信じて新しい心を頂いても、やがての天国に入る日まで罪との戦いの中にあり続けるのは本当です。時に私たちは自分は本当に変わったのかと疑いたくなるような罪に打ちのめされることもあると思います。そんな私たちにとっての望みはI

ヨハネ 1 章 9 節にこうあることです。「もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」 また自分の中から罪が出て来たと思うなら、私たちのすることはただガッカリし、失望することではなく、その罪を神の前に一つ一つ告白し、赦しを希うことです。そうする時、神はキリストにあってその罪を赦して下さるばかりか、さらにきよめてくださるとも約束くださっています。私たちはこうして諸悪の根源であるこの心を変えられて、聖い者とされて行くという神の恵みの導きの中に生かされる者とされて行くのです。

今日のイエス様の言葉は厳しいものです。しかしこれは問題はどこにあるかを私たちが知り、正しく救いを求めるようになるためです。イエス様はこの言葉を通して、ご自身のもとに来るようにとすべての人を招いています。私たちはこの言葉のもとで自らを正直に振り返り、私のために解決を持っていてくださるイエス様のところへ逃れて行きたいと思います。イエス様は身代わりの十字架の死を通して、私たちの罪を赦し、聖め、私たちの心を新しく造り変えて、そこから良いものが出てくるようにしてくださいます。そして私たちは神の御言葉にこそ第一の耳を傾け、神を心から愛していることを、その御言葉に注意深く歩むことにおいて現して行く者でありますように。そして父なる神によって植えられた木であることを証しして、この恵みをくださった父なる神にすべての栄光と賛美を帰す歩みへ進む者とさせていただきたく思います。